

新島伝の隠れ穴 一校長よりも（田舎）牧師一

講演	望 月 修 治〔もちづき・しゅうじ〕
講師紹介	日本キリスト教団同志社教会牧師

はじめに〈慶應義塾・早稲田V S 同志社あるいは福沢諭吉・大隈重信V S 新島襄〉

同志社が慶應義塾、早稲田と並んで「三大私学」と呼ばれていた時代がありました。慶應義塾の創立者は福沢諭吉、早稲田は大隈重信、そして同志社の創立者は言うまでもなく新島襄です。福沢諭吉は、宗教はもとより、あらゆるものから独立しようとした人物です。1880年代の初め、同志社は京都市中で公開講演会を定期的に開催していたのですが、その講演会に福沢の弟子たちが押しかけてきて、キリスト教攻撃の演説をするということが起こりました。福沢はキリスト教に距離を置き、キリスト教を盛んに攻撃していました。同志社のようなミッション・スクールに学ぶ学生は「文字を知る乞食」だと糾弾したと言います。大隈重信も宗教とは距離を置いていましたが、同志社には好意的でした。大隈は外務大臣当時、官邸で同志社大学設立募金集会を開いていることはその一例です。

宗教との向き合い方という点で見ると、新島は福沢や大隈とは真逆です。新島の理想は「信仰を以て学校の基礎となし、學術を以て左右の翼と為し」（新島襄全集編集委員会『新島襄全集』3 朋朋舎出版 1987年 305頁）ことにありました。「信仰」すなわちキリスト教が新島の心柱です。生きることにおいて「何を大切にするか」、それがその人やその家族の生き方、あるいは学園のあり方の方向を決めます。

校長よりも（田舎）牧師

新島襄は同志社を設立した教育者だというのが一般に定着している評価です。2013年に放送されたNHKの大河ドラマ「八重の桜」でも、オダギリ ジョーさんが演じた新島は教育者として描かれていました。しかし新島襄は教育者である前に牧師・宗教者（宣教師）です。同志社という学園は、教育者新島が設立したのではなく、牧師・宗教者（宣教師）である新島が、同僚の外国人宣教師たちと設立した学園（ミッション・スクール）であるというのが本来のことなのです。新島自身がそのことを語っています。1890年代中頃のことであったようですが、新島は辻密太郎という学生を伴って滋賀県に伝道のために出かけます。その折に、新島は辻にしみじみこういう主旨のことを語ったということです。「自分は校長をしているよりも、本当は田舎で伝道したいのです。しかし、今の日本にはこの事業をする人が他にいません。だから私は、教育に挺身しています」（本井康博『志を継ぐ 新島襄を語る』(10) 思文閣出版 2014年 264頁）同志社を設立した後、新島は何度も困難な壁に直面しました。そうした中で、弱気になることもあったのだと思います。その場合の逃げ場として思い巡ったのが、田舎（地方）伝道であり、特に北海道が念頭にあったようです。北海道の函館は、1864年に新島がアメリカ商船バルリン号に忍び込み、日本を脱出した地です。そこから上海を経て、大西洋を渡りアメリカのボストンに渡ることになり、新島の人生は思いもかけなかった方向へと導かれることになる、その起点となった土地です。伝道こそ自分がやりたい働きののだという思いは、新島の中にずっと宿り続けていて、それが本音として言葉になることがあったのだと思います。

なぜキリスト教なのか

皆さんにとって、宗教、信仰あるいはキリスト教と言われても具体的にどのように関われるのか、その手がかりが分からない。そもそも関わる必要性などあるのか、自分の人生にどのような意味をもたらすのか分からないというのが正直なところではないかと思います。加えてなぜキリスト教なのか、という疑問も皆さん誰もが抱かれるのではないのでしょうか。新島にとってなぜキリスト教だったのかという問いでもあります。まずそこから始めます。

宗教といっても、キリスト教だけではなくありません。さまざまな宗教があります。仏教、ユダヤ教、イスラム教（回教）、ヒンズー教、いずれの宗教も多くの信者を有しています。日本では無宗教という方も少なくないと思いますが、自分には関係ないと思わずに、「なぜ」という問いに少しお付き合いください。人がいろいろある宗教の中から一つの特定の宗教、信仰の道を選び、人生の基盤に据えて生きていこうという選択をする場合、何がその基準になるのでしょうか。どのようなことがその人の中で起こるのでしょうか。

私が洗礼を受けたのは高校1年生の時です。ただし洗礼は受けましたが、学生時代、「なぜキリスト教なのか」という根本的な問いが自分の中に答えを見出せないままあり続けていました。同志社大学で学部時代は社会福祉を学びました。そして神学研究科に進学し、神学を学び牧師の道を歩み出しました。神学研究科で学んでいたある日、ゼミが終わった後、旧約聖書の教授であった野本真也先生と今出川のキャンパスを歩きながら、私がずっと抱いていた疑問について聞いてみました。「なぜキリスト教なのでしょう？」。野本先生は「それは例えば結婚することと似ています。なぜその人が結婚相手なのか。それは相手と出会ったからとしか説明しようがない出来事なのです」と言われました。「一人の人と出会ってともに生きていきたいと思う。あるいは誰かと出会ってその人と友達になる。なぜその相手なのか。なぜその人と一緒に生きていこうと思うのか、なぜ友達になりたいと思うのか。そう問われたら、優しいから、思いやりがあるから、気が合うから、価値観が合うから、などいろいろと理由が語られます。しかしそれはその人だけがもっているものではない。他にそうした人はたくさんいるはずですよ。それなのに、なぜ特定のその人なのか。それは出会ったから。出会ってその人が自分にとって特別な存在、かけがえのない存在になったからです。宗教も同じです、なぜキリスト教なのか、それは出会ったからです。」と言われました。それは私にとって文字通り「目から鱗が落ちる」という体験でした。ずっと抱えていた疑問が氷塊し、深い納得が訪れた瞬間でした。

新島襄・ボストン・キリスト教

では新島の場合はどうであったのでしょうか。1843年に安中藩の江戸藩邸で生まれた新島が日本を脱出してアメリカのボストンで会衆派のキリスト教と出会い、明治維新後に帰国し京都でキリスト教主義の同志社英学校、同志社女学校を設立するにいたる歩みは冒険に満ちています。NHK連続テレビ小説「マッサン」の中でエリーが語ったことばを借りるなら、「人生はアドベンチャー」です。真理を学ぶと共に、その真理を生かし用いる心を、聖書に基づいた生き方を伝え教えることで育てる、そのための教育の場を日本につくる。その志を抱き、生きぬく人生を新島に歩ませたのは、新島の中にある強さということもあるかもしれませんが、第一義的にはキリスト教の信仰です。ボストンで出会った会衆派の教会の人たち、その人たちの出会いを通して新島が味わい知った聖書の世界、そこに語られている神と生き生きと出会ったことにあります。同志社大学の今出川キャンパスは、道を挟んで南側には京都御苑、そして北側は相国寺です。相国寺は金閣寺、銀閣寺を山外塔頭にもつ京都仏教界の一大勢力です。明治初期、そのような場所にキリスト教の学校を建てるなどというのは本来無謀です。多くの反対運動が渦巻く中で、しかし撤退せずに志を貫く、そのような生き方を新島に貫かせたのは、キリスト教の信仰であり、その信仰を共にする人々とのつながりでした。

新島がアメリカ・ボストンで8年間を過ごし、そして牧師となり、アメリカン・ボードという宣教師派遣団体から宣教師（厳密には準宣教師）に任命され、日本伝道のために明治維新後の日本に10年ぶりに帰国する、いや派遣されます。何が新島の人生をそのように方向付けたのか。そこに焦点を絞り込んで、時間を少し巻き戻して、新島のボストンでの8年間をたどり直してみることになります。ちなみにアメリカン・ボードは1810年に創立されたアメリカ最古のミッション／宣教師派遣団体です。

新島は1865年7月にボストンに入港し、10月にハーディー家に「養子」として迎え入れられました。ハーディーは新島が上海から乗り込んだ船ワイルド・ローバー号の船主であり、ボストン有数の資産家であり、熱心なキリスト教徒でした。そのハーディーに出会ったことは、新島にとって実に幸運でした。ハーディー夫妻から経済的・精神的サポートを受けて、新島はフィリップス・アカデミー英語科への入学が認められます。学校に通うため、学校近くのヒュドン家に下宿することになりました。この下宿先が新島にもう一つの幸いを届けることになりました。ヒュドン家に同居していた、アンドヴァー神学校の神学生であったE・フリント・ジュニア夫妻が家庭教師役を引き受けてくれたことです。新島も後にアーモスト大学を経て、このアンドヴァー神学校で学ぶことになります。フリント夫妻はアカデミーで学ぶ教科や聖書の家庭教師を務めてくれました。特にフリント夫人は聖書について手ほどきをしてくれました。新島は次のように報告しています。「フリント夫人は、毎夕、私に新約聖書を教えて下さいます」。それは聖書をはじめて系統的に学ぶ時間であったと思います。

生涯の基盤となる言葉

フリント夫人の手ほどきを受け、聖書を学び始めた新島は、生涯の基盤となる聖書の言葉に出会いました。ヨハネによる福音書3章16節の「神は独り子を世に与え給うたほどに世を愛された」という言葉です。これはフリント夫人が最初に新島に教えた言葉だとも伝えられています。この聖書の言葉は新島の心を揺さぶりました。キリスト教にはじめて目が開かれるという体験を味わいます。聖書の言葉はそんなような気づきの体験を私たちにもたらします。それは「聖書には無数の『穴』が空いている」からです（「ヤバイぜ！聖書」 新教出版社 2019年 3頁）。聖書を読んでいると心惹かれたり、逆に反発を覚えたりする箇所が必ずあります。そこが「聖書の穴」になります。聖書の壮大な世界を起動させる鍵穴です。鍵は私たち自身です。聖書の鍵穴は自分で聖書を読んで見つける以外にないのですが、でもまず一つでよいのです。聖書の一つの物語、一つの言葉が自分の中で動き始めたら、そこから聖書の物語が起動し、一変する景色が広がりはじめるといった体験が訪れます。それは井戸を掘って地下水脈に行き着くことに似ています。井戸を掘る場所は同じではありません。しかしそれぞれの場所で掘り進んで行ったとき地下に流れる共通の水脈に行き当たります。そして汲み上げる井戸は違っても、同じ水脈の水を汲み上げ、その水を飲み、命が養われます。聖書も同じです。心にとまった物語や言葉という一つの断片が聖書の壮大な物語を起動させ、生きることの見方、受け止め方を転換させるのです。

ボストンでの日々

新島にとっての鍵穴となったのが「神は独り子を世に与え給うたほどに世を愛された」という言葉でした。この聖書の言葉は、こののち終生、新島を支え続けることになります。フィリップス・アカデミーを卒業した新島は、1867年9月にアーモスト大学に入学します。アーモスト大学はリベラル・アーツ・カレッジとして現在もアメリカで有数の大学です。新島が留学した頃のアーモスト大学は神学校ではないのですが、宣教師を次々と輩出していました。「牧師製造工場」とも呼ばれていました。彼らはアーモスト大学を卒業すると、神学校（大学院）に進学し、宣教師への道へ歩み出して行きました。新島もその一人です。1870年7月、アーモスト大学を卒業します。学位は理学士です。もちろん日本人で初めてのことで。そして9月に

アンドーヴァー神学校（大学院に相当）に入学し 1874年7月まで4年間学びます。9月24日にボストンのマウント・ヴァノン教会で按手礼（正式に牧師になる儀式）を受け、正規の牧師資格を得ました。

新島はアンドーヴァー神学校卒業に先立って1874年5月10日に、マサチューセッツ州レキシントンのハンコック教会で、初めての説教をする機会を与えられます。そのとき選んだ聖書の言葉がヨハネによる福音書3章16節「神は独り子を世に与え給うたほどに世を愛された」でした。このときの説教は次のように始まっています。「私が選びましたこの聖句は新約聖書の中でも大層目立つ、特異なものでありまして、数多くの聖書の読者がこれに惹きつけられてきたように思います。この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすものでありまして、何故神が愛する御子をさへ惜しまずにこの世にお与えになったのか、またいかなる条件の下でなら、この罪深い人類は永遠の命を得ることができるのかという問題を、はっきりと説明するのであります。まことにこれこそは福音物語の神髄であり、地上で私たちの救い主が果たされた役割の意味を解くカギであります。」（同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波書店 2010年 143頁）新島も「カギ」という表現でこの箇所のことを語っています。聖書の言葉の中で大切な言葉を黄金の聖句と呼び呼び方があります。ヨハネによる福音書3章16節の言葉もその一つに挙げられています。宗教改革者のルターもこのヨハネによる福音書3章16節の言葉を「福音のミニチュア」と呼びました。いくらでも大きく描ける真理を、できるだけ小さな言葉に凝縮させた表現がここにあるという意味です。

「救われる」という体験

新島はこの聖書の言葉をボストンでの生活の中で、味わい深く読み重ねたのではないかと思います。ヨハネによる福音書3章16節の後半には「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」と書かれています。「滅びる」という言葉、この言葉はルカによる福音書15章に繰り返し使われているのです。イエスが語った三つの譬え話が15章には記されています。百匹のうちの一匹がいなくなってしまう、羊飼いがそれを見つけて大喜びする話、それから十枚の銀貨のうち一枚が無くなったために一生懸命探して、それを見つけて大喜びする女性の話、そして自分の財産を分けてほしいと生きている父親にねだって、さっさと家を飛び出して放蕩を重ねて結局、父のもとに帰ってきた息子の物語です。イエスがこの三つの譬え話で共通して語っているのは「失われた存在」です。一匹の羊が羊飼いのもとからいなくなりました。一枚の銀貨が持ち主のもとからなくなりました。息子が父親のもとからいなくなりました。「いなくなった」「無くなった」と訳されている言葉はいずれも、ヨハネによる福音書3章16節で「滅びる」と訳されているのと同じ言葉が使われています。滅びるということは、自分が関わりを持ち、思いを寄せていた者のもとからいなくなってしまう、その存在が消え失う、無くなってしまふことです。人間が神のもとを離れ去り、神にとって失われた存在になってしまった。その人間を呼び戻すために神は独り子を派遣して下さった。ご自分のもとから家出してしまっている者を呼び戻すことに一生懸命に働くのが聖書の神なのだと思います。新島はボストンでさまざまな人に出会い、助けられ、支えられました。それは日本を脱出して失われた存在となっていた自分を見つけ出してもらった、という体験だったのではないかと。そして日本では気づきようもなかった視点、生きることへの新しい視点をもつことを、驚きをもって味わい知ったのではないかと。

新島のように、今向き合っている現実や課題に対する視点が転換される、新しく何かに気づくという体験を誰もがおもいだしたいと思います。視点が変わることで、それまで行き詰まっていたいまいかわず壁のように立ちはだかっていた現実を全く違った形で受け取り直すことができます。そして一步を新しく踏み出すことができます。それが聖書に語られている「救われる」ということの中身です。救いとはそれまで気づけなかった別の視点が与えられて、これでまた生き直すことができると考えることです。その時、人は救われたと思うのです。絶望感、諦め、束縛感から解放されます。「なるほどそういうことか」という納得を味わうのです。新島がアメリカで体験した聖書の世界との出会いは、生きることへの視点を転換させられる「救い」を味わう体験であったと思います。そしてその体験は人の生き方を変えるのです。新島を変えたのだと思います。帰国後の新島の働き、生き方の基盤となったのです。

宣教師・新島襄の誕生

1874年、按手礼を受け正規の牧師資格を得た新島は11月26日に横浜に帰港しました。明治維新後の日本へ帰ってきました。その時の身分はアメリカン・ボードから派遣された宣教師です。正確には準宣教師です。帰国時の新島の「準宣教師」という身分については少し説明が必要かもしれません。アメリカン・ボードは、当初、新島を宣教師として派遣する意向があったようです。しかし新島はネイティブ、つまりアメリカ人ではないということがネックになりました。アメリカン・ボードは、アメリカ人以外の者を宣教師に任命したことはなかったからです。このことをめぐる議論は、新島を準宣教師扱いとするということで決着しました。アメリカン・ボードが行おうとしていた日本伝道において、新島は文字通りのキーパーソンでした。すでに日本に派遣されていたネイティブ（アメリカ人）の宣教師たちは、日本語の習得に苦勞し、彼らの伝道活動は言葉という壁にぶつかり、思うようには展開できていなかったからです。その障壁がない宣教師の存在は、日本での伝道活動のために渴望されていました。日本語に障壁をもたない新島の派遣はその課題が一気に解決されるということです。ところで宣教師と準宣教師と違いは何かと言いますと、準宣教師にはミッションの会議での議決権がないことです。会議への参加、討議に加わることは自由でしたが、唯一のハンディキャップが議決権をもたないことでした。

では、新島自身は日本へ宣教師（準宣教師）として派遣されることをどう思っていたのでしょうか。実はその願いを新島は早くからもっていました。1868年のことです。アーモスト大学在学中のことですが、夏季休暇の時に、新島は一人の友人と一緒に、N・G・クラークという人物の家で一晩過ごしました。クラークはアメリカン・ボードの総幹事を長年務めた人です。翌朝の祈禱会の時に、最初の祈禱を頼まれた新島の祈りは家族の心に記憶として長く留められた祈りであったと言えます。朝の祈禱会が済むと、新島はクラークの手を握って、母国に宣教師を派遣してほしいと熱心に懇願しました。新島の願いは翌年1869年に実現します。アメリカン・ボードによる日本伝道の開始は、この時の新島の進言が一つの契機となりました。

アンドーヴァー神学校卒業を間近にした1874年3月、神戸にいた宣教師D・C・グリーンはクラークに書簡を送り、「早急に新島を日本に帰国させ、伝道にあたらせてほしい」（『同志社教会双書3『京都のキリスト教一同志社教会の19世紀』 同朋舎 1998年 30頁）と要望しています。この書簡を受けて、クラークは新島にグリーンからの手紙もみせて、「日本での伝道にあたる意志があるかどうか」とたずねました。新島に異論はありません。この年に4月には新島の日本への派遣が決定されました。

ただ、日本で働いたアメリカ人の宣教師たちは、準宣教師という身分で、しかも日本人である宣教師を初めて受け入れるにあたって、多少の戸惑いがありました。「準宣教師」という微妙な問題をめぐる懸念を宣教師のO・H・ギューリックは書簡に記して、ボストンのアメリカン・ボード宛に書き送っています。これに対するクラークの返信は新島への高い評価を伺わせる内容です。「ニシマ氏が帰国することで、微妙な問題がいくつか起きることについて言及されていますね。彼は投票権のない、ミッションの準宣教師として帰国いたします。彼はどんな仕事にでも当たれるように備えられています。円熟した学徒であり、熱心で献身的な信徒です。またあらゆる意味で、日本人の感受性と天性の礼儀正しさを兼ね備えた紳士です。私たちは彼が日本ミッションの大きな戦力になってくれるものと判断しております」（同 35頁）。

帰国した「牧師・新島襄」

1874年11月、新島は宣教師としてアメリカン・ボードから派遣され日本に帰国しました。10年ぶりの故国です。当時、日本におけるアメリカン・ボードの伝道拠点は神戸と大阪にありました。新島はまず神戸に配属されますが、まもなく大阪に変更になりました。大阪での伝道活動に人的な補強が必要となっていたからです。新島はさっそく大阪の教会（摂津第二公会、現在の大阪教会）の仮牧師として、日曜日の礼拝説教を始めとする教会活動の責任を担います。新島と言えば、帰国以来、学校設立に邁進したと思われているのですが、新島の本分はあくまで牧師です。1875年には京都に転出し、アメリカン・ボードや山本覚馬らの協力を得て、11月29日に同志社英学校を設立します。山本覚馬は新島の妻となった八重の兄であり、京都府顧問を務めていた人物です。このエピソードが出てくると、教育者新島というイメージが前面に出てくるのですが、しかし新島の第一義はあくまで牧師なのです。そのことを伝えている証言があります。同僚であったJ・D・テイヴィスの証言です。「1875年に彼【新島】が京都に来たときの最初の仕事は、安息日に自分の家で礼拝を開始し、男女から成る小さなグループにキリストを宣べ伝えたことであった」（同 63頁）。京都での新島の初仕事は礼拝を守ることでした。牧師としての働きを果たすことでした。

その基本姿勢は英学校設立のちょうど1年後、1876年に三つの「同志社の教会」を11月26日（日）から一週間ごとに設立したということにも表されています。三つの教会（公会）は西京第一公会、西京第二公会、西京第三公会です。ただし、いずれも宣教師の借家で始められました。「家の教会」です。第一公会はラーネッド宅、第二公会は新島宅、第三公会はドーン宅です。資金がなかったからではなく、当時の京都府知事であった植村正直が、教会に対して独立した会堂を建てることを認めなかったからです。ちなみに私が今牧師として働かせていただいている同志社教会は、基本的に第二公会を母体にして誕生した教会です。その初代牧師（仮牧師）は新島襄です。そして最初の信徒が新島八重です。学園と教会との関係性を新島は「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」という言葉で表しました。真理を学ぶこと、そして学んだ真理を生かし用いる心を育むこと、それが車の両輪となってなされる教育を行うことを主旨として設立されたのが同志社英学校です。基盤はキリスト教です。聖書に語られている人間観、生き方を基として教育を行う、それが同志社の教育の心柱です。牧師である新島が行う教育なのです。教育と伝道を両立させる、学校と教会のいずれも大切にすることが新島の理想であり、目指したことです。

教会合同運動牧師・新島襄の難事件

新島襄が最晩年（1886～1890年）に直面した二つの大問題があります。同志社大学設立運動と教会合同運動です。前者は教育者新島にとっての大問題、後者は牧師新島にとっての難問題・難事件でした。

教会合同運動は、牧師新島にとって同志社英学校大学昇格運動と並ぶ最大の関心事でした。これは1886年に始まった二つの教派が合同を進めようとした運動のことです。当時の代表的なプロテスタント教派であった長老派（日本基督一致教会 1877年設立）と会衆派（日本組合基督教会 1866年設立）が合同を目指したのです。

長老派は16世紀の宗教改革者カルヴァンを源流とする教派です。長老派教会は牧師と信徒の中から選ばれた長老を中心に階層的な組織を作って運営されているのが特徴です。

会衆派は宗教改革の基本精神である「信仰のみ」「聖書のみ」という原点に立ち直し、教会が国家の強制から自由であることと、キリスト者は牧師も信徒も神の前に平等であることを徹底し教会運営を行う立場をとります。

教会合同運動は同志社系の組合教会を二分する事態になりました。新島の教え子である小崎弘道をはじめとする牧師たちは合同を推進する立場に立ちますが、新島は批判的であり慎重な姿勢を崩さなかったのです。この問題をめぐっては子弟が対立し、新島は推進派から激しいバッシングを受けました。結局、教会合同運動は新島が死去した1890年に挫折して終わります。

新島はなぜ子弟対立を生んでもなお合同に反対したのか。「自由教育と自治教会」という新島が理想とした両輪の一方である教会が「自治・自由」を手放してしまうことになることを何よりも懸念したからです。長老派教会の教会運営は牧師と長老を中心とする中央集権的傾向であるのに対し、組合教会は会衆が本位で、各教会が自治権を持つ「会衆主義」に立った教会運営が行われます。長老派教会と組合派教会とが合同した場合の教会運営は、長老派の階層的組織によるものとなってしまう、会衆主義を衰退させると新島はみただけです。

「真理は爾曹（なんじ）に自由を與える」

新島にとって「自由」とは決して失ってはならないものでした。ボストンで会衆派の伝統に生きる教会の人々に出会い、そこに息づく「人格の尊厳、自由、平等、自主、独立、自治、愛」の精神に強く感化され、「自由」の価値を身につけました。

1890年1月27日、新島襄の葬儀の際に、遺体を若王子山頂に運び葬列に十数本の幟が付き添いました。その中にヨハネによる福音書8章32節の言葉が記された幟がありました。「真理は爾曹（なんじ）に自由を與える」。これは新島襄の生涯を象徴する聖書の言葉です。

束縛されないことが自由であるという考え方があります。新島が語る自由はそれとは異なります。真実の自由は、自らの意志によって、必要な時には、自分の望みや行動をあえて抑えることも含めて、なすべきことを決断する自由です。人は生きる限り、必ず何らかの制約や条件のもとに生きなければなりません。人間の自由とは、このような制約や条件から解放されることでは必ずしもないのです。そうではなく、こうした状況や条件に対して自分のあり方を判断し、選択する自由こそ、本来なのです。自由とは「自分の勝手」ということではなく、他者とのつながりの中で、相手を生かし支えるために自分のあり方を選び取る自由のことです。それが、新島が真理を学ぶ自由教育とともに、それを生かし用いる心を育てるために自治教会を併行させた理由です。

ボストンで新島が出会った人々には、日本からやって来た見知らぬ東洋人である新島を選ばないという選択もありました。しかし彼らは新島に関わり、支援する道を選び取り、一緒に歩んでくれました。聖書が語る自由には、「神の招きに応える自由」＝「神を選ぶ自由」だけではなく「神を選ばない自由」の両方があります。

「真理は爾曹（なんじ）に自由を與える」ここでいう真理とは神を意味します。神は人に「神を選ぶ自由」「神を選ばない自由」その両方を含んだ「自由」を与えているのだと思います。そのどちらを選ぶか、その主体は私たちです。何を選ぶか、それがその人の生きる方向を決めます。新島襄が選択したのは「牧師・新島襄」を基盤として「教育者・新島襄」を生きる道であったと思います。

2020年10月28日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
オンラインによる「講演」記録